

オフィスデザインにおける人間・非人間の配置

大妻女子大学 牧野智和

1 目的

国土交通省主導のもとに 2007 年に発足した知的生産性研究委員会の各種刊行物、経済産業省と連携したニューオフィス推進協議会の調査報告書 (2007)、そして多くの書籍・雑誌がオフィス環境と知的生産性の関係性について論じ、「創造的」なオフィス環境の構築を訴えている。それらの主張におけるスタンスは、素朴な技術決定論にみえるものからより複合的な影響関係をみているものまでバリエーションをもっているが、いずれにせよ「創造性」という目的に向けて、オフィスの物理的環境とそこで働く人々を望ましいかたちで組み合わせようとしている点に変わりはない。

本報告では、人間および非人間のアイデンティティをともに「異種混交的なネットワークによって生み出された効果」(Law 1992: 383-4) とみなすアクターネットワーク理論 (ANT) の見解を参照しながら、今日におけるオフィス環境をめぐる議論において、どのような布置連関のもとにオフィス空間、オフィス家具、そしてそこで働く人間が配置・配分されているのか、その「ハイブリッドのデザイン」(上野・土橋 2006) のあり方について、オフィスレイアウトをめぐる議論の系譜を追いながら検討する。

2 方法

国立国会図書館サーチおよびオンライン書店データベースにおいて、オフィスおよびその類義語(「オフィス」「仕事場」「職場」「ワークプレイス」「コワーキングスペース」)で検索を行い、書誌情報からそれらの物理的環境の変革に言及している可能性があるものとみられた 191 冊をまずピックアップした。次いでこれら 191 冊をチェックして、(1) オフィス環境についての言及がないもの、(2) 設計図面集、(3) OA 化のマニュアル本をそれぞれ除外した 119 冊を主要な分析対象資料とする。合わせて、建築関連雑誌を中心としたオフィス関連の記事(オフィスの設計、オフィスのレイアウト・空間構成、オフィス環境の改善、オフィス一般についての考察、オフィスに関する「新動向」についての紹介にそれぞれ関するもの)を補助資料とする。これらを対象として、オフィスに関するどのような物理的環境の変革が、そこで働く人々のどのような主体性の変革に結びつけて語られてきたかを分析した。

3 結果

オフィスをめぐる議論は 1950 年代から蓄積が始まったが、この時期から 1970 年代にかけては、無策になされているオフィスレイアウトの「効率」的配置が主張されていた。1980 年代、OA 化とニューオフィス化の波のなかで、従来のオフィス空間から多様な空間へと労働者は「解放」され、創造性の発露を促されるようになる。2000 年代中頃からは、グローバル化という背景のもとで創造性発露への圧力が増した状態で、労働者はコミュニケーションとアイデアを「誘発」する幾重もの「仕掛け」のターゲットとなっていく。

4 結論

近年異口同音に言及される創造性への志向は、1980 年代からみられるものであった。オフィスを執務空間に限らず多様化し、コミュニケーションスペースを増大させよとする言及もその頃から大きくは変わっていない。変化したのは 1990 年代後半以降の「トータルワークプレイス」論による働く場所への戦略性付与、および 2000 年代後半以降のオフィス環境へ書き込まれる啓発的ティップスの「多孔化」(鈴木謙介)であると考えられた。

文献

Law, John, 1992, 'Notes on the Theory of the Actor-Network: Ordering, Strategy and Heterogeneity, *System Practice*, 5(4), 379-393.

上野直樹・土橋臣吾編, 2006, 『科学技術実践のフィールドワーク——ハイブリッドのデザイン』せりか書房.